

春です。新しい風を…

テレビ朝日で放映されている、お坊さんバラエティー『ぶっちゃけ寺』を楽しみにしています。10名程の各宗派の僧侶が佛教知識をわかりやすく紹介しています。この番組を安心して気持ち良く見ることができるのは、MCを「爆笑問題」がしている効果の他に、出演している僧侶が「我が宗では、〇〇〇です」と言わないことです。全員が同じ方向を見ていることを感じます。「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」…、古典落語に出てきますが、なかなか「真」を突いた文句だと思います。

このように教義論争などしない代わりに、私は他宗の僧侶方と交流が少ないですし、知らないことばかりです。迷走坊さんが誘って下さって、ある行事で関市の黄檗宗(禅宗)のお寺へ行くことができました。黄檗宗というと、私の知識では、京都宇治市の大本山萬福寺の「普茶料理」、江戸時代初期(1654年)に隠元和尚が中国から来日された折、「インゲン豆」を伝えられたということぐらいでしょうか。当日、その住職さんがお称えになられた御経を聞いてびっくりです。『般若心経』なら、ご一緒にお称え出来ると思っていたのでなおさらです。

『般若波羅蜜多心経』 観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空 … 揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦。菩提薩婆訶。

御経が中国語読みなのです。帰宅して試みたのですが、これがなかなか難易度が高くて苦戦しています。興味がある方はYouTubeでふりがな付きの映像がありますのでご覧ください。

私にとって黄檗宗は極めて興味深いものとなりました。大本山萬福寺へ行ってみますと、^{さいどう}齋堂(食堂)の前に^{かいぼん}開槲(写真)がぶらさがっています。これは、食事や法要の前に集合の合図



に使われるもので、隠元和尚が中国福建省から来日の際伝えられたという「木魚」の原型

です。それどころか、木魚、鐘、太鼓、銅鑼などの多種の楽器を駆使し、リズムを取りながら読経をするスタイルを隠元和尚が初めて日本に紹介されたのです。当時の日本佛教界にとってはかなりのカルチャーショックであったことでしょう。私たちが当たり前前に打っている木魚は、江戸時代初期以前はなかったのです。また諸堂をめぐる一切畳が無いことに気が付きます。中国式の石畳みです。ですから正座ではなく立って読経します。最後、礼拝の際は円座に座具(布製の敷物)を敷いて行います。また雲水さんたちの食事也是中国式で、テーブルと椅子、大皿にもったおかずを各々取り分



けて食事をするというスタイルです。

江戸時代初期、隠元和尚を中国から招き、中国式の建物で萬福寺を建立し、あえて作法等すべてを中国風にこだわった背景には、鎖国時代が始まり数十年、佛教界がマンネリ化しないよう、「新しい風を吹き込む」という意図があったようです。これは『友引町内会通信』の意識するところでもあり、現在の私たちも常に心がけねばならないことだと、肝に免じています。

俊徳丸